



「弁慶の足跡」やと。

清水町の谷川にも大きい岩があつての。そこには  
弁慶が馬に乗って跳んだときついたひずめの穴が、一  
つくつきり残ってるんやと。

尾花の山では、水源になつてるあたりに大きい岩が  
多くての。そんな中で目立つのが「なた岩」や。弁慶がなたを落としたんで、割れたそつな。

三社森では、戦の相談をしたんやと。

そして河内の的岩や。まるい大岩が二つ並んでいる。向かいの山の  
清根坂から弁慶がこの岩を的にして弓をひいたんや。表面がゴツゴツ  
してるのは、矢のあたつた跡やと。

どれもこれも弁慶の話はこつ快やのお。



### 37 庄屋のやべさま

江戸時代、西袋に代々弥兵衛という庄屋があつたんや。本宅のまわりには米蔵や酒蔵が建ち並  
んでいて、プーンとお酒のいい匂いがたちこめていた。門の前の出道は米蔵に米を運びこむの  
に、どの村道よりも広くなつていた。

西袋は河和田じゅうで一番大きい村や。弥兵衛さまには鯖江藩の米を入れる米蔵まであつた。  
田植えが終わると、秋の稲の刈り取りまでの長い間、村の元気な男たちは漆掻きに東北や関東ま  
でも出かけていった。採った漆が売れるまで現金は手に入らなかつたから、旅立つときは弥兵衛  
さまにお金を借りて出かけたもんや。

江戸時代も後半になると、ごこのお殿様もたいていは借金をかかえて大変やつた。一年おきに  
参勤交代つて言うて、お供を従えて江戸まで行かなあかなんだ。しかたなしに金貸しから借金し  
たり、農民に沢山の米を収めさせたんやと。時には、金持ちの町人や庄屋に寄付させていたんや  
と。



庄屋の上には大庄屋があつて、二十いくつかの村をまとめていたんや。この大庄屋が都合の悪い時には、弥兵衛さまが大庄屋のかわりをしたこともあつたと。弥兵衛さまの家は、鯖江の殿様に何百両もの大金と、一時に二百六十俵の米をさしあげたこともあつた。

ところが、いいことは何時までもは続かなんだ。

落ち目になるとの、パタパタと家も土地も人手に渡

つて、なんと水呑百姓になつてしまつた。

そこへ追い打ちをかけたのが、西袋でも何十人も

飢え死にした天保の大飢饉や。弥兵衛さま一家も生

きるか死ぬかの瀬戸際になつてしまつた。

これを聞いたお殿様は、昔世話になつたお礼に粉

二俵恵んでくださったんやと。明治三十年ごろ一人暮らしのおばあさんが死んで、家は絶えてし

もたんや。はかないのう。

そやけど、弥兵衛さまが酒造りに使つたおいしい水は、今でもこんこんと湧き出している。



弥兵衛さまの持つていたごんぼ畑は、今も石ころひとつもなご畑やぞ。

長いこと口づてに語り継がれているうちに、「やへえさま」は「やべさま」となつてもたけ

ぞ、山の中にはお墓もたつている。高いところから西袋の移り変わりを眺めていなれるんやろな。

### 38 お寺を守つた天神さま

もう二百年ほども前のこと、西袋の本定寺のいちようが黄色に色づいたころ、その美しさに

そわれたのか、旅のお坊さんが、ふらつとたずねてきた。そして、えんがわで、ごえんさんのい

れたお茶をいしそにのみながら、めずらしい話をはじめた。話はずんで「晩泊めてもらつ

たお坊さん、筆をとり出して、「紙を下さらんか。お礼に一幅かきましよう。」といつた。

紙の上にくつと身をのり出したお坊さん、筆にたつぷり墨をぶくませると、さらさらと手に梅

の小枝を持つた天神さまをかきあげた。腰に下げた小袋から「ハン」を二つとり出すと、ポンポン